　我が家は、毎日のようにお客が来て夜は宴会。でもお開きの時がくると必ず聖歌を歌った。家庭の中に信仰、つまり神に感謝したり祈ったりすることが日常の挨拶のように身近であると、祈り本を開かずに祈ることができる。仕事の初めは聖歌。皆さんも歌本無しで歌える好きな聖歌などあれば（同じように）できる。奉仕の仕事は自分にとって喜び、人も喜んでくれると嬉しい。なによりも神さまへの捧げもの。祈りになっていくことが良い。奉仕が台無しにならぬようにしよう。

　神学校を志願したのは、「神父様になりたい」純粋な気持ちよりも「早く家を出たい」切実な願い。実家の酒屋の手伝いが嫌でした。しかも長男に親は厳しい。長崎の神学校に入った先輩たちが輝いて見えた。「自分も輝けるかしら…」。入学後は楽しくてホームシック無し。起床時間が実家より遅く、聖堂は同じ建物内で「楽だわ―」。楽譜も読めるので「オルガニストに」抜擢され、練習をはじめる。少し弾けるようになると、毎日ミサの聖歌決めと準備の練習。弾けて当然、少しでも音が違うと指摘を受けるので、昼休み返上で練習。音楽が「楽しくない…」気持ちが芽生え…。しかし次第に「自分で作りたい」。聖歌の作詞作曲を始める。みなさんにも今日はせっかく西宮から来たから、能力を披露します(笑)。2002 年から 3 年間園長だった宮古島のみつば幼稚園の園歌で、「かみさま」の語は入ってないけれど、「キリスト教の精神が子どもに伝わるよう」願い作曲。 2 曲目＝沖縄の夏の子どものキャンプのテーマ『キリストのように』。

和やかに昼食が終わり、第 2 講話が始まりました。

　出エジプトの民は荒れ野で 40 年。世代替わりの民が約束の地に（モーセさえ入れない）。　創世記でアダムとエバはエデンの園で、何でも自由にとって食べることができたが、「禁断の木の実は食べぬ」神との約束に背く。結果エデンの園から追放。回心して神に立ち返り、また背く繰り返しが旧約の世界にみられる。ついに新約になるころは、ローマ帝国支配の奴隷国家状態。先祖がエジプトの奴隷生活から脱け出したように、またダビデの王国のように、栄光を取り戻したい思いが高まる。「イエス様が国を独立させ、栄光の時代をとり戻す」期待感が大。聖書の中に『神の国』という語がたびたび現れる。この語は神のお望みが行われる状態を指すが、当時のイスラエル人には外国に支配されない独立国を作り上げるイメージ。
ルカ 12-29～34 を紹介。「何を飲もうか、何を着ようかと思い悩むな。…(中略)…小さな者よ、誰も恐れるな。あなた方の父は喜んで神の国を下さる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。…略」。神の国はこの世のものでなく霊的なもの。必要なのは神の望みを行うこと。聖パウロ（ローマ人への手紙１４－１７）「神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです」。『神の国』は「立派な王国を建てる」ことではなく、私たちの心の中に築かれる状態のこと。神さまが「私たちに行きなさい」と示される霊的な場所は永遠の命、つまり復活の命を与えようとしておられる。その命は死後ではなく、この地上ですでにスタート。「神様が喜ばれることをしよう」という生き方の中にすでにイエスと同じ永遠の命があることを神さまは気づかせようとしておられる。

　ところで皆さんは永遠の命を得るためにどんなことが必要？（答えは聖書に）
「わたしは毎日曜日ミサに参加、朝夕の祈り、隣人にも親切」。果たしてそれで良いのか？聖書でイエスが金持ちの青年に答える箇所―「あなたに欠けているものが一つある。あなたの持っている物を貧しい人々に施しなさい。それから私に従いなさい」―。つまり「持っている物を分かち合おう」、「その後イエスに従おう」という姿勢の中に永遠の命が始まっている。施す物は単に金銭や財産でなく、もっと霊的な意味で、持っている能力、そして信仰も施しになると思う。信仰の喜びなど自分の豊かさを、それに飢えている人々―「生きがいがない。何のために生きているか分からない」人々―に、「人生は素晴らしい！生きていて良かったじゃない？」と分かち合うため、なぜ伝えようとしない？自分の救いのためにひたすら信仰の道を歩む個人主義ではなく、もっと共同体としての生き方を 神様は求めておられる。
『嗣業の土地』は「自分だけの物、人に与えられぬ」と解するが、もっと大きく考えよ。神の民の共同体として、すべての人がすばらしい恵みに預かる。神はすべての人を子としてみておられる。イエス様はそれを伝えようとした。外国の人・罪びと・貧しい人・病人だろうが　すべての人が神さまの救いに預る。特別な人ー律法を正しく守る人・財産持ち・健康な人―そういう人だけが永遠の命に預かるのではない、と口を酸っぱくして言おうとしておられるのをもう一度思い出そう。

『嗣業』の意味には　「神さまが人々に与える」というイメージだけでなく　もう一つ逆の意味。詩編３３-12 など数か所にある表現。「いかに幸いなことか、神を主とする国、主が嗣業として選ばれた民は」。この「嗣業」とは、神が与えられた、私たちが頂いている何かの恵みだけではない。逆の発想で、「神さま、あなたにとって　私たちイスラエルは嗣業の民ですよ」という意味。「神様、私たちはあなたが決して見捨てることができない、次の世代までもずっと面倒を見なくてはいけない、手放すことの出来ない嗣業の民ではありませんか？私たちを見捨てないで下さい。目を留めて、憐れんでください。私たちはあなたの民です。私たち一人一人は、神さまが与えたすばらしい恵みを受け継ぐべきすばらしい状態（嗣業）にいるのです」。

最後に…、どうやって私たちが頂いたものを与えるのか？たとえば、自分の土地を子どもに相続させたいなら、法律上の面倒な手続きが必要。上手に分けると良いのだが、個人主義の如く「持っている者を他人(ひと)に取られたくない。奪われずに守ろう」とすると、これがまた争いのもとに。現在も、イスラエルが「これは神様に頂いた土地だ」と言い張るあまり、アラブとイスラエルの争いは絶えない。エルサレムをめぐってイスラム教とユダヤ教もキリスト教も、「なんとか自分のものに」と、争いが絶えない。「みんなのもの。分ち合おう」としない。遺産相続の子どもたちが、互いに「あんたの方が多い！」と、争うようなもの。信じる心・神さまの教え、それは個人でなく、みんなで分かち合う共有財産。聖パウロ、「私たちは共同の相続人ではないか？」。みんなで天国の喜びを、永遠の命を受け継ぐ資格があるのだ。

ヤコブの手紙２章 14～26 節―　「私の兄弟たち、『自分は信仰がある』と言っても、行いがなければ何の役に立つでしょうか。そのような信仰が彼を救うことができるでしょうか？もし兄弟の一人が着るものが無く、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなた方の誰かが、彼に『安心していきなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要な物を何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。…(中略…人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるのではありません。」

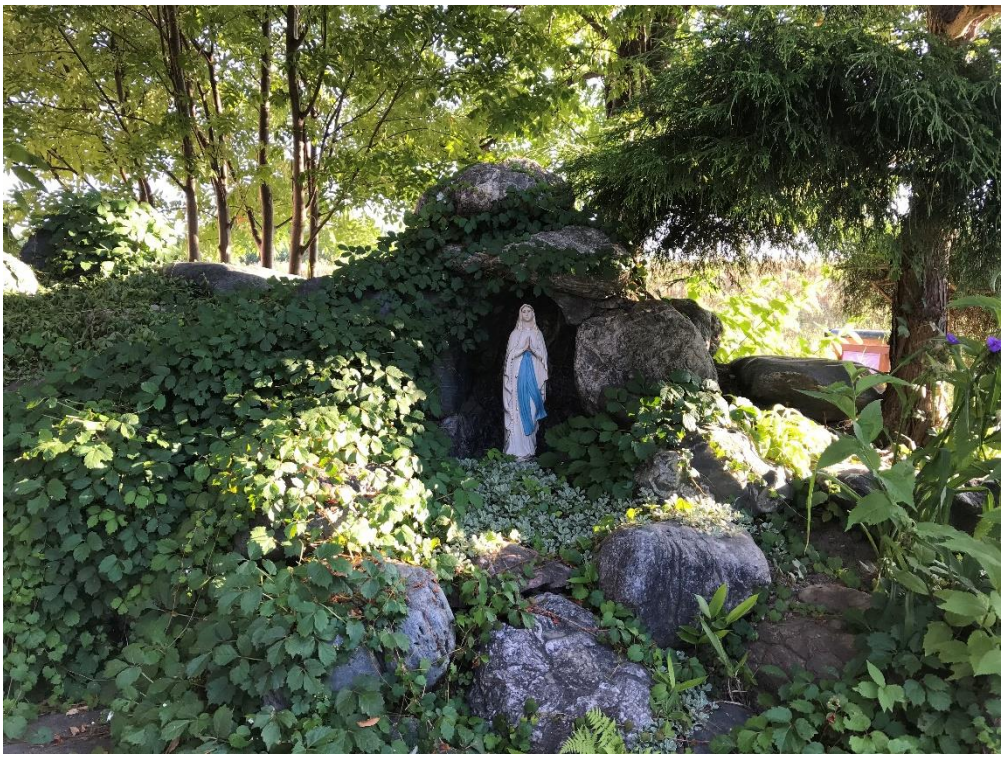
信仰は漠然とした言葉や思想などでなく、具体的な行いが伴うもの。私はどう信仰を受け継いだか？はたして父・母・祖父母などは、毎日聖書を読み、学んで得た知識を子どもに学校の勉強のように教えたのか？いや、両親たちは、一緒に祈る・聖歌を歌う・教会へ行って祈る姿を見せたが、神学に詳しく・聖書をよく知り、旧約の話をしてくれたのでは(決して)ない。いつもロザリオを持って祈っている姿

に、一番「あぁ、これが本物だ…。大切な事だ」。」と感じ取った信仰である。自分の行いを持って、「神さまが大事である」ことを伝えよう。一緒に繰り返し体験させてもらったことが私の受け継いだ信仰の何かだと感じる。

結び

私たちは、自分はいったい親から何を頂いたか、またこれまで関わってきた多くの人たちから、何を教わり、何を示してもらったのか、振り返る時、自分を形造ってきたもの・受け継いできたものを知る。　辛い・悲しい経験の中にも　豊かさ・恵みがある。それを閉じ込めておくことなく、恐れず、恥かしがらずに「私はこう思う。私はこれが喜びで、素晴しいことだと思う」と胸を張って表現していこう。一人では時として難しい表現でも、皆で・共同体として祈る言葉・姿・声が大事。たとえば教会やミッションスクールで、未信者の子たちに祈る機会や喜びを伝えたい。そのために自分も与えられた場で励んでいくつもり。どれだけの人が洗礼に導かれるか解らぬが、洗礼者の数に一喜一憂することなく、伝えること自体が喜びとなるなら、それが私たちにとって神様からの大きな恵み=ご褒美である。

（Sr.増山 文章を起こしていただきありがとうございました。）編集スタッフより



白百合幼稚園と聖ヴィアンネ会の中間にあるルルド
子どもたちは登園すると真っ先にマリア様のところへ来てお祈りをします。